

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32510

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13241

研究課題名（和文）共感的反応からみる日本語会話のモデル開発

研究課題名（英文）The Development of Japanese Conversational Model for Empathic Reaction

研究代表者

釜田 友里江（Kamata, Yurie）

神田外語大学・グローバル・リベラルアーツ学部・講師

研究者番号：00807167

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はネガティブな経験に対する共感的な反応の特徴を語り手の経験の語り方と聞き手の共感的な反応の観点から明らかにすることを試みた。2019年・2020年に日本語話者の会話データ（国内）と日本語話者と日本語学習者の会話データ（国内外）、2021年に日本語話者と日本語学習者の会話データ（国内）を収録した。収集した会話データを分析し、日本語学習者が円滑にコミュニケーションを行えるためのモデル会話の開発に役立てるための研究を行った。会話を分析した結果、自己卑下が長引くことを阻止しようとする共感的な反応や愚痴の継続を促す共感的な反応がみられた。また「それな」という表現で愚痴に反応を示す方法も観察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は日本語会話データを収集し、日本語会話の構造を共感的な反応から解明したものである。具体的にはネガティブな経験の語りに対する共感的な反応の特徴をみた。これにより、円滑にコミュニケーションを行うための共感の仕方を明らかにした。本研究で得られた結果は、会話相手の語りを尊重しながら相手に寄り添う方法であるため、日本語学習者だけでなく、日本語母語話者への貢献にも繋がる。この知見を活かし、相手に寄り添うことが求められる介護現場での外国人介護職員と利用者、外国人介護職員と日本人介護職員などのコミュニケーションにおける誤解の回避などに役立てることを目指す。

研究成果の概要（英文）：This research investigated the characteristics of empathic responses to negative experiences from the perspective of the teller, regarding to the way of telling the experience and the listener's empathic responses. Conversation data of Japanese speakers and conversation data between Japanese speakers and learners of Japanese in 2019 and 2020, Conversation data between Japanese speakers and learners of Japanese in 2021 were recorded. We analyzed the conversations and conducted research to develop a model of conversations for Japanese language learners to communicate smoothly. Analysis of the conversation data revealed the following features. First, the listener was attempting to prevent prolonged self-deprecation of the teller. Secondly, the empathic response of the listener when encouraging the continuation of the moaning of the teller was observed. An alternative way of reacting with the moaner was also seen by using the expression of 'sorena'.

研究分野：日本語教育、社会言語学

キーワード：共感的な反応 ネガティブな経験 日本語会話 自己卑下 愚痴 それな

1. 研究開始当初の背景

(1) 円滑なコミュニケーションのための共感

ネガティブな経験を語ることは、聞き手に不快感を与えるため、積極的に語るほうが好ましくないとされ、控えることが望まれる場合がある。しかし、自分のネガティブな経験を認めてほしいという欲求から、語ることを控えようとしても語らずにはいられない語りである。語り手は、聞き手になるべく負担をかけないように語ろうとするが、共感が得られないと語ることができない。一方、聞き手は、語り手の語りに共感できる場合もあれば、共感できない場合もある。共感できない際は、会話のストラテジーを用いて相手を傷つけないように伝えなければならない。齟齬や誤解の回避に繋げるためのコミュニケーション研究が必要である。

(2) 日本語学習者のための共感

日本人でさえ、語り手の意図がうまく伝えられずに聞き手との間に齟齬が生じることがある。日本語を母語としない学習者にとっては、日本語でのネガティブな経験の語り方とそれに対する共感的な反応を示すことは、なおさら困難である。韓国語話者の会話(李:2006)と中国語話者の会話(崔:2009)では、相手に向かって「不満」を直接的に伝える傾向がある。一方、日本語話者の会話においては、相手に向かって不満を表明しないことが指摘されている(李:2006、牧原:2008、崔:2009)。したがって、韓国語話者や中国語話者がそのまま母語の会話ストラテジーを用いて日本語で日本語話者と会話を行うと、強く非難されたと誤解を与えてしまう危険な行為に繋がる。会話が進まなくなるだけでなく、人間関係に支障が生じる可能性も高い。日本語力だけでなく、人格さえも誤った判断をされてしまう。このようなトラブルを回避するためにも、ネガティブな語りの構造を解明し、日本語学習者がコミュニケーションを円滑に行えるようにすることは重要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語会話の構造を共感的な反応から解明し、日本語学習者が円滑にコミュニケーションを行えるためのモデル会話を開発することである。ネガティブな経験に対する共感的な反応の特徴を語り手の経験の語り方と聞き手の共感的な反応の観点から明らかにする。

3. 研究の方法

2019年・2020年に日本語話者の会話データ(国内)と日本語話者と日本語学習者の会話データ(国内・海外)、2021年には日本語話者と日本語学習者の会話データ(国内)を収集した。データを収集後、会話分析の手法を用いて分析を行った。その後、データを分析し、2021年に日本語教師のための会話分析会、2022年に関西会話分析研究会で関連研究者に分析の方向性、客観性について確認した。

4. 研究成果

会話データを分析した結果、自己卑下と愚痴に対する共感の仕方が明らかになった。また、愚痴に対して「それな」という表現で共感を示す方法が観察された。

(1) 自己卑下に対する共感的な反応の特徴

釜田友里江(2022)『日本語の自己卑下発話の連鎖』『神田外語大学日本研究所紀要』(14)155-180.

自己卑下が長引くことを阻止しようとする聞き手の共感的な反応を分析した。

自己卑下に対しては、聞き手が語り手を「特別な存在」として扱うことで、語り手のポジティブな部分を引き出し、共感的な反応を示していた。語り手が特別な存在であることを示す機会になっている。同時に聞き手の共感的な反応は、自己卑下の継続を防ぐような機能を果たしていた。自己卑下に対する聞き手の反応は、語り手を否定したり傷つけたりするリスクも高い。しかし、本研究のデータにおいては、共感的な反応を通して語り手を尊重するような振る舞いがみられ、卑下を阻止する方法となっている。

表1 自己卑下に対する共感的な反応

自己卑下の直前の発話	自己卑下	聞き手の反応
語り手の経験が語られた後の聞き手の評価 ・ポジティブ評価(提案・褒め) ・ネガティブ評価(指摘)	聞き手の評価に反応を示すために自らを低く語る ・提案・褒めを拒否するための卑下 ・指摘を受け入れるための卑下	共感的な反応 ・語り手を特別な / 例外的な存在として扱うことで 尊重 卑下を 阻止

(2) 愚痴に対する共感的な反応の特徴

釜田友里江(2023)「会話の中でみられる愚痴の継続と終え方 - 聞き手の共感の仕方に着目して - 」『神田外語大学日本研究所紀要』(15) 179-203.

愚痴の継続と終了のやりとりにみられる聞き手の共感的な反応を分析した。

愚痴に対しては、聞き手が語り手と似た経験を示しながら語り手の経験に寄り添う方法が観察された。単に似た経験を語るのではなく、異なる切り口から経験を語ることで、違う観点からみても「あなたの愚痴は妥当である」という共感的な反応である。同時に語り手の愚痴の継続を促している。他の側面から語ることで語り手の愚痴を支持するという証明の方法は、語り手を理解できる証拠としての独自性が高まることを示した。

表2 愚痴に対する共感的な反応

愚痴を継続	→	愚痴を終了
<p>・聞き手</p> <p>[継続のタイミング] 反応を示すことが期待されているとき</p> <p>[継続方法] 聞き手が類似経験を示す</p> <p>+</p> <p>語り手が用いていた観点の他の側面に 焦点を当てる</p>	}	<p>・語り手</p> <p>[終了のタイミング] 聞き手の共感的な反応後</p> <p>[終了方法] 観点を換え、 自分の落ち度を認める</p>
共感的な反応		

(3) 愚痴に対して「それな」という表現を用いて反応を示す

釜田友里江(2023)「愚痴のやりとりにおける「それな」の特徴 - 大学生の会話に着目して - 」『神田外語大学紀要』(35) 231-251.

「それな」という表現を用いて愚痴に対して反応を示しているやりとりを分析した。

2つの事例を取り上げた。事例1では相手の経験を認める際に「それな」がみられた。事例2では「相手の経験+共感的な反応」を認める際に「それな」が観察された。『三省堂国語辞典第八版』では、指摘に同感することばとして「それな」の説明が行われている。問題点をはっきり示したり(『三省堂国語辞典第八版』) 相手が気づいていないことを知らせたりする。指摘に対する同感と相手の経験に対する承認とは、相手に働きかけている行為が異なる。また、言語形式から「それな」の使い分けが示唆された。事例1では、Bが「 そうなんだよ: 」と「それな」を使い分けていた。事例2ではCが「 <そう> 」と「それな」を使い分けていた。「それな」の直後の発話の特徴として、「それな」によって相手の経験を認めた後に、なぜ相手の経験を認めることができるのかについての理由説明が「それな」の使用者によって行われていた。具体的に自らの経験を語ることで、単に反応を示したのではなく、相手の経験を認めることができる十分な証拠があるという提示になっている。「それな」によって相手の経験を認め、その後、なぜ相手の経験が承認できるかという説明を行う際に自らの経験を持ち出していた。

表3 相手の経験を認める際に用いられる「それな」

直前発話	それな	直後の発話
経験	<p>・相手の経験を認めるため</p> <p>・「 そうなんだよ」「そう」と「それな」を使い分け</p> <p>事例1 B「 そうなんだよ: 」 B「 <u>それな</u> 」</p> <p>事例2 C「 <そう> 」 C「 <u>それな</u> 」</p>	<p>・「それな」によって反応を示した者</p> <p>理由説明</p> <p>具体的に自らの経験を語りながら相手の経験を認めることができる理由を説明する</p>

引用文献

見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大(編)(2022).『三省堂国語辞典』(第八版)三省堂

崔東花(2009)「不満表明とそれに対する応答 - 中国語母語話者と日本語母語話者を比較して - 」『千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』218, 43-63.

牧原功(2008)「不満表明・改善要求における配慮行動」『群馬大学留学生センター論集』7, 51-60.

李善姬 (2006) 「日韓の「不満表明」に関する一考察 - 日本人学生と韓国人学生の比較を通して - 」 『社会言語科学』 8(2), 53-64.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 釜田友里江	4. 巻 15
2. 論文標題 会話の中でみられる愚痴の継続と終え方 - 聞き手の共感の仕方に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 神田外語大学日本研究所紀要	6. 最初と最後の頁 179-203
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 釜田友里江	4. 巻 35
2. 論文標題 愚痴のやりとりにおける「それな」の特徴 - 大学生の会話に着目して -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 神田外語大学紀要	6. 最初と最後の頁 231-251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 釜田友里江	4. 巻 33
2. 論文標題 コロナ禍において日本で研究を続ける留学生の経験の語り - 日本人の知人との会話に着目して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神田外語大学言語教育研究	6. 最初と最後の頁 41-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 釜田友里江	4. 巻 14
2. 論文標題 日本語の自己卑下発話の連鎖	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神田外語大学 日本研究所 紀要	6. 最初と最後の頁 155-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 釜田友里江
2. 発表標題 ネガティブな経験に対する共感的な反応 - 中国で日本語を学ぶ学生と日本人学生のオンライン交流場面に着目して -
3. 学会等名 2022年度日本語教育と日本学研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 釜田友里江
2. 発表標題 相手の経験に寄り添う際にみられる「それな」の特徴
3. 学会等名 第59回表現学会全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 釜田友里江
2. 発表標題 オンライン交流場面における共感的な反応の特徴 - 現地で日本語を学ぶ大学生と日本人大学生の会話 -
3. 学会等名 Japanese Studies Association of Australia 2023/ International Conference of the Network for Translingual Japanese（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 釜田友里江
2. 発表標題 留学生の語りに対する共感的な反応 - オンライン会話で近況報告をしている場面に着目して -
3. 学会等名 2021年度日本語教育と日本学研究国際シンポジウム（中国日語教学研究会上海分会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 釜田友里江
2. 発表標題 言い訳に対する共感的な反応の特徴
3. 学会等名 表現学会第57回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 釜田友里江
2. 発表標題 オンライン会話において愚痴はどのように継続されるのか - 聞き手の共感的反応に着目して -
3. 学会等名 2020年度 日本語教育と日本学研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 釜田友里江
2. 発表標題 日本語学習者の学習に関する経験の語り - 日本語学習者と日本語教師の会話に着目して -
3. 学会等名 第17回日本語教育研究集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 釜田友里江	4. 発行年 2024年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 共感が対人関係構築に果たす役割 - 日本語会話における自慢・愚痴・自己卑下の語りに注目して -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------